

# ドイツ語を母語とする中級日本語学習者の文章の わかりにくさの要因

ー あらすじの説明における主語と視点の表現に  
注目して ー<sup>1</sup>

(Gründe dafür, dass die Texte fortgeschrittener deutschsprachiger Japanischlernenden so schwer verständlich sind: Ausdrücke für das Subjekt und für die Perspektive in Nacherzählungen<sup>2</sup>)

加藤由実子 Kato, Yumiko (ハレ・ヴィッテンベルク大学  
Universität Halle-Wittenberg)

## 要旨/Zusammenfassung

日本語学習者は、中級になると文型や表現が豊かになり、ある程度のまとまった文章を書くようになる。しかし、その文章には、個々の文としては特に間違いがないにもかかわらず、読みづらかったり、スムーズに理解できないと感じられたりする箇所がよくある。

本稿では、ドイツの大学の日本学科で学ぶ中級日本語学習者が書いた文章を事例として、先行研究でわかりにくさの要因として研究されてきた個々の問題の関連性を追求する。本稿で扱う問題は、(1) 頻繁な主語交替による一貫性を欠く視点と不適切な主語省略、(2) 不適切な人物指示表現、(3) 主語をマークする際の助詞「が」「は」の誤りによる文または文構造の変容である。

Fortgeschrittene Japanischlernende sind in der Lage, verschiedene Satzformen und Ausdrücke zu verwenden und längere Texte zu schreiben. Häufig gibt es in ihren Texten jedoch schwer verständliche Teile, obwohl einzelne Sätze an sich keine besonderen Fehler enthalten.

Im vorliegenden Beitrag werden die Zusammenhänge verschiedener Ursachen für Unverständlichkeit, die von verschiedenen Wissenschaftlern herausgearbeitet wurden, diskutiert. Dabei werden Texte von fortgeschrittenen Japanischlernenden, die Japanologie an einer deutschen Universität studieren, als Beispiel angeführt. Problematisch sind: 1) eine uneinheitliche Perspektive und die unpassende Auslassung des

- 
- 1 本稿は2015年2月28日に第21回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム(於ハイデルベルク大学)で行った口頭発表の内容に基づく。
  - 2 Der vorliegende Beitrag basiert auf dem Vortrag, den die Autorin am 28.02.2015 an der Universität Heidelberg beim 21. Symposium des Vereins „Japanisch an Hochschulen e. V.“ gehalten hat.

Subjekts durch den häufigen Wechsel des Subjekts, 2) unpassende Ausdrücke für die Personenreferenz, 3) die Störung der Satz- bzw. Textstruktur durch Fehler bei den Partikeln *ga* und *wa* zur Markierung des Subjekts.

## 1 はじめに

言語学者の池上嘉彦によると、文章とは文 (sentence) の上にたつ言語的単位であり、ばらばらの文の集まりでないということ (結束性 cohesion) は、情報の連続性を示す仕組みによって保証される [池上 1983: 7-11]。その方法はいろいろあるが、文章は基本的に、旧情報 (old information) に新情報 (new information) を加えながら展開される [池上 1983: 11]。例として、ある日本語母語話者が書いた「シンデレラ」のあらすじ説明の冒頭部分 (1) を見てみよう。これは Kato [2011] で収集されたものである。(原文のままに掲載する。各文頭の数字は本稿筆者によるもので、文の番号を示す。以下の例も同様。)

- (1) ① 昔々ある所に可愛らしい女の子がいた。② その女の子はシンデレラという名前である。③ シンデレラは母親を亡くし、父親にとっても愛されて育ったが、父親が再婚したことで継母と二人の義姉と暮らすこととなる。④ まもなくして父親も他界し、シンデレラは継母と義姉からいじめられ、掃除や洗濯など下働きをさせられ毎日を過ごす。 (Kato [2011: 303] より)

(1) はあらすじの冒頭であり、主人公の女の子 (シンデレラ) が導入される部分である。導入の方法を新情報と旧情報に注目して見てみよう (表 1)。

表 1 (1) の文章の情報構造

文	旧情報	新情報
①		可愛らしい女の子
②	その女の子	シンデレラという名前である
③	シンデレラ	母親を亡くし 父親にとっても愛されて育った 父親が再婚したことで継母と二人の義姉と暮らすこととなる
④	シンデレラ	まもなくして父親も他界し 継母と義姉からいじめられ 掃除や洗濯など下働きをさせられ 毎日を過ごす

①で新情報として導入された「可愛らしい女の子」は「が」でマークされている。そして②では旧情報として「その女の子」となり、「は」でマークされる。そこで「シンデレラ」という名前が新情報として導入される。③以降、女の子は「シンデレラ」と呼ばれるようになり、旧情報として「は」でマークされている。③と④では、「シンデレラ」がテーマとなり、シンデレラの視点から、シンデレラの境遇が説明されている。シンデレラの視点に立っていることは、受身（「愛されて」「いじめられ」「させられ」）を使った描写からも明らかである。

このように、主語をマークする助詞「が」と「は」<sup>3</sup>は、文章構造とも関係があり、文章の結束性を支える重要な要素となっている。図1は永野 [1985] が日本語の最も基本的な文章型としてまとめたものである。

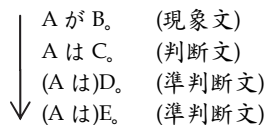


図1 日本語の最も基本的な文章型 [永野 1985]

日本語の文章型を簡単にモデル化すると、主語が同一の場合、第一文で導入された主語（「が」でマーク）は、第二文で旧情報として「は」でマークされ、第三文以降では省略される。文法論では、この各文は現象文、判断文、準判断文と呼ばれる。このように、文章の結束性とは、助詞の使い方とも関係があり、また省略とも関係している。

次に、ドイツ語を母語とする日本語学習者が書いた文章を見てみよう<sup>4</sup>。(2)は『魔法の声』(原題: Tintenherz)というファンタジー作品のあらすじの始めの部分である。

- (2) ① 中心人物はメギーです。②メギーは十二才で、「モー」というお父さんと一緒に住んでいます。③モーの仕事は製本屋ですから、メギーは小さい少女代から本を読むことが大好きです。④でも何回が願ってもモーは本を全然読み聞かせてあげません。

(2) ではまず主人公「メギー」とその父親「モー」の二人が導入される。その情報構造は表2の通りである。

3 主語が「は」でマークされた場合は、文の主題としての機能を持つ。

4 データの詳細は第3節を参照。

表2 (2)の文章の情報構造

文	旧情報	新情報
①		メギーです
②	メギー	十二歳で 「モー」というお父さんと一緒に住んでいます
③	メギー	モーの仕事は製本屋ですから 小さい少女代から本を読むことが大好きです
④	モー	何回が願っても 本を全然読み聞かせてあげません

(2)の文章の①から③では、新情報が旧情報として次の文に受け継がれ、上手な主題展開が行われている。しかし、④で違和感を覚えまいだろうか。原因は補助動詞「てあげる」にある。③までメギーを中心とした描写になっているにもかかわらず、主語を「モー」とし、動詞に授受補助動詞「てあげる」をつけることで、モーの視点からの描写に変わってしまっているのがある。ここは「てくれる」を使い、メギーの視点からの描写にすると、視点の一貫性が保たれ、読みやすい文章となる。日本語の文章では、視点の一貫性も文章の結束性を維持する手段のひとつである。

本稿でいう「わかりにくい文章」というのは、この例のように、何らかの理由によって結束性が妨げられている文章を指す。

## 2 研究課題

本稿の目的は、ドイツ語を母語とする中級日本語学習者の文章のわかりにくさの要因を探ることである。日本語のレベルを中級とする理由は、基本的な文法事項の学習を終え、ある程度まとまりのある文章や談話を産出し始める時期だからである。また、文章の中でも本稿では三人称形式の文章を対象とする。その理由は、客観的な事実をどのように描写するかというところに問題が現れることが多いためである。研究対象とする文章の詳細は次節で説明する。

これまでの第二言語としての日本語習得研究は母語別のものが多く、研究結果が学習者の母語に関係なく一般化できるものなのか、それぞれの母語の干渉によるものなのか、明らかでない場合も多い[田代2005:1、迫田他2016:94]<sup>5</sup>。しかし、ドイツ語母語話者の文章を対象とした研究はほとんどなく、ケーススタ

5 この問題を解決するため、迫田他(2016)は、多言語母語の学習者から収集したコーパスデータをもとに、検索システムの開発を進めている。今後、これを活用した研究の進展が期待される。

ディとしてドイツ語母語話者についての研究を行うことは意味がある。

先行研究では、さまざまな問題が扱われているが、個々の問題が相互にどのような関係にあるのかはあまり整理されていない。またそれらの問題がどのような根本的な問題となっているのかを論じたものも見かけない。

そこで本稿では、次の3つを研究課題とする。

- 1) 頻繁な主語交替によるわかりにくさへの影響
- 2) 人物指示表現によるわかりにくさへの影響
- 3) 「が」と「は」の使い方によるわかりにくさへの影響

### 3 研究対象とする文章について

本稿で研究対象とする文章は、2014/15年冬学期に、ドイツ語を母語とするハイデルベルク大学日本学科<sup>6</sup>の3学期生が授業の課題として書いた400字から800字程度の作文である。この学生たちの日本語力は初級後半から中級前半(A2-B1程度)<sup>7</sup>である。つまり、ここでの分析対象は、ドイツ語を母語とし、ドイツの大学の日本学科で、外国語環境かつ教室環境において日本語を学ぶ、10代後半から20代前半の中級日本語学習者の書いた文章である。

作文のテーマは「読んだ本」または「見た映画」である。最初に作者などの基本情報を述べ、次にあらすじを説明し、最後に感想を書くという構成で書くように指示し、ほとんどの学生がこの構成で書いている。本稿の関心は三人称形式の文章であるため、特に、本または映画のあらすじを説明した部分が考察の対象となる。

収集された作文は38本であるが、上述の条件に合わないもの(非ドイツ語母語話者<sup>8</sup>、日本語力や文章力が著しく劣っている、上述の構成で書いていない、あらすじ部分が短すぎる)を除外し、28本の作文を採用した。

本稿では、前節にあげた3点の研究課題に関して、「わかりにくさ」のある箇所を例として挙げながら、考察を行う。なおその際、作文の引用箇所は原文のまま掲載する。また、各文頭には文の番号を示す数字を付している。

---

6 筆者の2016年9月までの勤務校である。

7 厳密な日本語能力測定をしたわけではないが、3学期には2学期の期末試験に合格した者しか進めないため、ある程度のレベルの均衡は取れていると考える。

8 本稿では、主にドイツ語を使って生活し、教育を受けてきた者であれば、ドイツ語母語話者として扱う。非ドイツ語母語話者とするのは、留学生や移民1世など、ドイツ語以外の言語を第一言語とする者である。

## 4 考察1: 頻繁な主語交替によるわかりにくさへの影響

### 4.1 主語交替と注視点移動

(3) は映画「螢火の杜へ」のあらすじ説明の一部である。主人公「螢」と精霊「ギン」の間の出来事が描写されている。

- (3) ① 螢は6才の時、森で道にまよいました。② この森でせいに会いました。③ 彼の名前はギンできつねのかめんつけています。④ 「私は人間にさわると、きえてしまいます。」とギンは言いました。⑤ ですから螢はギンにさわるとはできませんでした。⑥ ギンは螢を帰り道へ案内しました。⑦ そして螢はギンにプレゼントをあげるために、次の日も会いたいと思いました。⑧ この日から夏休みの終わりまで毎日螢はギンに会いました。

この文章の主語はほぼ一文ごとに交替している。つまり螢とギンの行為または様子を交互に描写している。このような語り方は、日本語母語話者にとって、「誰が何をしたか」という事実だけを客観的に述べているという印象を受けるものである。

行為者に注目して語るため、主語が頻繁に変わるのであるが、ドイツ語や英語では一般的な語り方である。ドイツ語の文は「主語が最も強く文の構造に関わって」おり、「主語に注目の焦点を合わせ、これを『主役』として出来事を描く」[成田 2008: 113] ためである。それぞれの行為を、その行為の主体を中心に据えて描写しているため、観客は舞台全体を眺めているというよりは、それぞれの行為を行っている人物のほうに目をキョロキョロと動かして見ているイメージである。このような、話し手が場面の中で注目して描写している人物や物は「注視点」と呼ばれる[松木 1992]。

一方、日本語では、「視座」と呼ばれる語りの立場、つまり、どこから、または誰の立場から描写するか<sup>9</sup>が重要になる。注視

---

9 視点を「視座」と「注視点」に分けるという考え方は心理学からきたのものであるが、これを日本語の文法研究に用いたのは松木 [1992] である。松木は、それまでの日本語の文法研究において「視点」の概念の中に「視座」と「注視点」の両方が混在していたとし、それを厳密に分ける必要性を主張した。松木 [1992: 63-65] は次の二つの文の違いを例に説明している。

(a) 鎌倉は横浜に近い。

(b) 鎌倉は横浜から近い。

松木はこの例で、形容詞「近い」に必要な基準点が「に」でマークされるか、「から」でマークされるかによって、話し手の視座が変わることを述べている。どちらの文も注視点は「鎌倉」である。視

点(どこに注目するか)が頻繁に変わる場合でも、視座(どこから見るか)が一貫していると、文章に一貫性がもたらされるのである [cf. 久野 1978、山田 1985、田中 2001]。視座が言語的にどう表現されるのかについては 4.3 で扱う。

次に、複文の場合を見てみよう。(4) はファンタジー小説『ホビットの冒険』のあらすじ説明の一部である。主人公「ビルボ」が遭遇した出来事が描写されている。

- (4) ①ビルボだけは途中で一行とはぐれてしまう。②細いトンネルで不思議な指輪を発見する。③その後、「ゴラム」と出会う。④二人はなぞなぞをして、ビルボが勝てば、ゴラムが出口までの道を教えるが、負ければゴラムが彼を食べる。⑤その時姿を消す指輪の力を探知して、外に逃げることができた。

①から③までの主語はビルボで、②と③ではそれが省略されている。主語省略としては許容範囲である<sup>10</sup>。

④はビルボとゴラムの間の出来事を描写した文である。この文(5)のように4つの節からなる複文である。

- (5) ④-1 二人はなぞなぞをして、  
 ④-2 ビルボが勝てば、  
 ④-3 ゴラムが出口までの道を教えるが、  
 ④-4 負ければ  
 ④-5 ゴラムが彼を食べる。

そして表 3 のように、節ごとに主語が交替している。表中の括弧内の語は省略されている文要素である。

表 3 (5)の文構成

節	主語	目的語	述語
1	二人は	なぞなぞを	して
2	ビルボが	(ゴラムに)	勝てば
3	ゴラムが	(ビルボに)出口までの道を	教えるが
4	(ゴラムが)	(ビルボに)	負ければ
5	ゴラムが	彼を	食べる

座は、(a)は鎌倉であるが、(b)は「から」が起点を表すことから、横浜であると説明している。

10 前文と同一の主語を省略しているという点では適切である。本当の意味で読みやすい文章と言えるためには改善の余地があるが、本稿では扱わない。

日本語では、一文内で主語が頻繁に変わるのは、読みにくく、よくない文だとされる。読みにくいのは視点が頻繁に変わるからでもある。視座を一点(一人)に固定する表現を使うことにより、一文内の主語交替をせずに文を構成することができ、自然で読みやすい文となる。視座の問題については4.3で扱う。

## 4.2 主語の交替と過剰省略

前節で頻繁な主語交替の例とした挙げた例(4)を、ここでは主語の過剰省略という観点から見てみたい。(6)に(4)の④と⑤を抜粋して掲載する。

- (6) ④二人はなぞなぞをして、ビルボが勝てば、グラムが出口までの道を教えるが、負ければグラムが彼を食べる。⑤その時姿を消す指輪の力を探知して、外に逃げることができた。

前節の表3で、④の文内の各節の主語がほぼ交互に代わっていることを見た。ここでは主語交替の様子を⑤と合わせて見てみよう(表4)。

表4 (6)の文構成

文	節	主語	その他の文要素	述語
④	1	二人は	なぞなぞを	して
④	2	ビルボが	(グラムに)	勝てば
④	3	グラムが	(ビルボに)出口までの道を	教えるが
④	4	(ビルボが)	(グラムに)	負ければ
④	5	グラムが	彼を	食べる
⑤	1	(ビルボは)	姿を消す指輪の力を	探知して
⑤	2	(ビルボは)	外に	逃げることができた

④の読みにくさは、節ごとに主語が交替していることと、主語が交替しているにもかかわらず4つ目の節の主語が省略されていることに原因がある。そして⑤では、主語が④の最後の節の主語と異なるにもかかわらず、省略されているため、誰の行為なのかかわかりにくい。⑤の文に「ビルボは」という主語があれば、問題がない。これらは主語の過剰省略であり、読み手にとってわかりにくさを生んでいる。

日本語は省略が多い言語だと言われる。同一の指示対象を反復する場合は省略されることも多い。ドイツ語などでは定冠詞や代名詞による部分反復が結束性を生む手段であるが、日本語



の場合は省略がそれに相当する機能を持っている<sup>11</sup>。特に主語の省略はよく行われるが、それは文章の結束性を高める手段の一つとしても機能しているのである。

省略に関する基本的な制約を久野暉がまとめている。それによれば「省略の基本原則」は「省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から復元可能(recoverable)でなければならない」[久野 1978: 8]。そして省略は「より古い(より重要度の低い)インフォーメーションを表わす要素から、より新しい(より重要な)インフォーメーションを表わす要素へと順に」[久野 1978: 15]行わなければならない。つまり、省略すべきでないものを省略してしまうと、わかりにくい文章になる。読み手は省略された主語を復元することができず、わかりにくい文章だと感じるのである。主語が頻繁に変わらないですむ言語的手段が日本語にはあり、その習得は重要である。それでも頻繁に主語が交替する場合は、どの主語を省略してもいいか、判断できなければならない。

### 4.3 頻繁な主語交替と視点移動

第1節の(2)に挙げた例を視点という観点でもう一度見てみたい。(7)がその例で、ファンタジー小説『魔法の声』のあらすじの最初の部分である。

- (7) ①中心人物はメギーです。②メギーは十二才で、「モー」というお父さんと一緒に住んでいます。③モーの仕事は製本屋ですから、メギーは小さい少女代から本を読むことが大好きです。④でも何回が願ってもモーは本を全然読み聞かせてあげません。

第1節では、③までがメギーの視点からの描写であるにもかかわらず、④が「モー」からの視点に変わってしまっていることがわかりにくさの原因となっていると述べた。そして、④で授受補助動詞「てあげる」ではなく「てくれる」を使うことでメギーの視点からの描写にすることができ、視点の一貫性が保たれることも述べた。日本語母語話者にとって、突然の視点(視座)移動は不自然に感じられるものであり、文章の読みやすさを損ねるものでもある。授受補助動詞などの視点表現手段を上手に使って、視点を一貫させることが必要となる。

このように、日本語では結束性を生み出す方法の一つに「視点の一貫性」がある。ふつう「話し手は常に自分の視点を取る」[久野 1978]のものであり、「単一の局面は単一のカメラ・ア

11 省略を反復の一種(ゼロ代名詞)として扱う考え方もある [cf. 牧野 1980]。

ングル(視点)しか取ることができない」[山田 1985]という原則がある<sup>12</sup>。ここでいう「視点」とはつまり「視座」(どこから見るか)のことである。

日英語の対照研究を行った大江 [1975]によると、英語と比べて日本語は主観的に表現される傾向が強い。久野 [1978]の言葉を借りれば、話し手が自分の視点を保持しながら表現する傾向が強いということである。話し手が関わらない出来事を描写する場合でも、その中のある人物に感情移入をして、その人物寄りの視点から描写する [久野 1978]。文学作品では「主人公に身を寄せ、周囲の人物や事件を語っていく場合がほとんど」[石丸 1985]である。そのようにして視点(視座)が一人の人物に統一されれば、その人物を指示する表現が省略可能となるのである。

「視点」は言語的に表現される。ヴォイス(voice)<sup>13</sup>と視点の習得を研究した田中真理 [2001]は、視点を表す文を3種類に分けて(図2)、学習者の日本語における視点の問題を考察している。

#### A [能動グループ]

能動文: (私が)ジュースを飲んだ。

使役文: (私が)後輩にビールを飲ませた。

#### C [視点変換の補助動詞]

受益文「てくれる」: 友達が(私に)ノートを貸してくれた。

補助動詞「てくる」: 友達が(私に)電話をかけてきた。

#### B [受動グループ]

直接受身: (私が)友達に旅行に誘われた。

使役受身: (私が)先輩にビールを飲まされた。

受益文「てもらう」: (私が)友達にノートを貸してもらった。

間接受身: (私が)弟にコンピューターをこわされた。

cf. 自動詞表現: 私のコンピューターがこわれてしまった。

図2 視点を統一するための言語的手段 [田中真理 2001: 207 より]

図2のA [能動グループ]は動作主を主語とする構文、B [受動グループ]は行為の受け手を主語とする構文である。AとBの間に書かれているC [視点変換の補助動詞]は、AとBの中間で、

12 逆に言えば、視点が変わることで、局面が転換したことが示されるのである。

13 態ともいう。動詞における文法範疇の一つで、主語と行為の関係を示す。ある出来事を行為の仕手と受け手のどちらの視点から描写するかによって変わる。能動態、受動態、使役態などがあり、日本語では受益文も含まれる。

動作主を主語とするが視点は行為の受け手にある構文である。  
[田中真理 2001: 206-207]

田中によると、学習者にとって習得困難なのはC [視点変換の補助動詞] である。水谷 [1985] も「てくれる」や「てくる」といった補助動詞は他の言語に対応するものがないことが多く、非用<sup>14</sup>になりがちな表現であると述べている。また習得が不十分だと誤用 (mistake) を恐れて避用 (avoidance) も起こりやすい [Kleinmann 1978]。

では、4.1 の (5) で見た例を、今度は視点という観点で見よう。(8) がその例である。

- (8) ④-1 二人はなぜなぞをして、  
 ④-2 ビルボが勝てば、  
 ④-3 グラムが出口までの道を教えるが、  
 ④-4 負ければ  
 ④-5 グラムが彼を食べる。

この例は、節ごとに主語が入れ替わっていることと、それにもかかわらず主語省略が行われていることの2つの問題があった。

図3は(8)の視点(注視点)の移動を示したものである。数字は節の番号を示している。大きな四角は場面を、その中の楕円は登場人物を示している。二人の人物の間の矢印は、行為の方向を示している。その場面(四角)を、外から「話し手」が見ていることを、話し手から伸びる直線矢印が示している。「話し手」とは、ここでは文章の書き手(つまり学習者)である。点線矢印は、話し手が場面の中で注目している人物、つまり注視点を示している

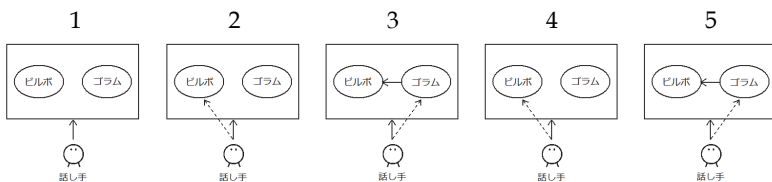


図3 (8)における視点移動

14 「非用」というのは水谷信子による造語である。水谷 [1985: 14] は、ある表現を使用した結果あらわれた間違い、つまり「使用の失敗例」を「誤用」と呼び、使用しないために誤用が表面に出てこないものを「非用」と呼んでいる。そして、もっとも学習しにくいものは「非用」となり、また「非用」は誤用以上に母語の影響の根強さを示すものだとしている。

この描写の仕方は、話し手が外部の視点から描写しているもので、客観的に感じられるものである。(4)の前後の文ではビルボに注目しているので、(4)もビルボが中心になるように描写したほうが、読みやすい文になる。

視座を変えるために、授受補助動詞や受身表現を使い、(9)のようにすると(下線は筆者)、主語がすべてビルボに統一され、その結果、省略が可能となる。さらに5節目の「彼」も不要となる。

- (9) ④-1 二人がなぞなぞをして、  
 ④-2 ビルボが勝てば、  
 ④-3 グラムに出口までの道を教えてもらえるが、  
 ④-4 負ければ  
 ④-5 グラムに食べられる。

図4は(9)の視点(視座と注視点)の移動図である。3と5でビルボに話し手の顔がついているのは、話し手がビルボの立場(視座)から語っていることを示している。二人の人物の間の二重矢印は、視点表現(3は「～てもらう」、5は受身表現)が使われていることを示している。

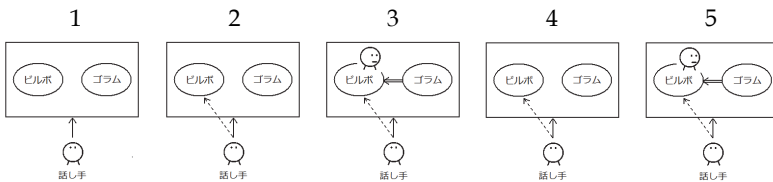


図4 (9)における視点移動

図4から、行為の主体がグラムであっても、主人公のビルボに注目し、ビルボの視座からグラムの行為を描写していることがわかる。

森山 [2007] は、学習者にとって習得の難しい授受表現、「行く・来る」、受身表現について、英語での把握の仕方の違いという観点で分析をしている。それによると、日本語は主観的把握、英語は客観的把握をする。ドイツ語も英語と同様のタイプだと考えられる。視点の表現が使えないと、客観的な語りに感じられ [田中真理 2001]、読み手が感情移入しにくい文章になってしまう。

では、「視点」は、視点の表現が未習得だから統一できないのか、視点の表現が習得済みでも視点を統一することを知らないために使えないのか、どちらだろうか。魏 [2010] によると、まず個々の視点表現が使えるようになってから日本語らしい視

点の取り方が習得されるということである。つまり、視点表現を使って視点を統一することができないということは、視点表現そのものの習得が不十分だということである。

## 5 考察2:人物指示表現によるわかりにくさへの影響

### 5.1 言い換え

(10) はディズニー映画「白雪姫」のあらすじ説明の一部である。主人公の白雪姫とその継母を指す表現に注目されたい。

(10) ①数年後に、継母はいつものように魔法の鏡に「一番美しいのは誰？」と聞きました。②鏡は「世界で一番美しいのは白雪姫」と答えました。③女王はいつも一番美しい女の人でいたかったので、白雪姫を殺そうとしました。④だから姫は逃げ出して、森の中に七人と一緒に住んでいました。⑤女王これを聞いて、白雪姫の所に行きました。⑥りんごを使って彼女を毒害しました。⑦死にませんでしたが目が覚めませんでした。

①の「継母」は③と⑤で「女王」となっている。「継母」が「女王」であるという知識がないと、同一人物であることがわからず、文章中の人物の関係がよくわからなくなってしまう。

白雪姫については、④で「姫」となり、⑥で「彼女」となる。日本語母語話者にとって「白雪姫」は固有名詞(人物名)であり、ふつう「姫」と略すことはない。そのため「姫」は不自然に感じられる。

また、「彼女」は固有名詞「白雪姫」を指す代名詞ではあるが、ドイツ語などの人称代名詞とは機能が異なる。「彼女」という語には名詞的な性格があり、先行詞を受けた言い換えではない場合もあるため、必ずしも文章の結束性を高めるものではない<sup>15</sup>。この「彼女」が「白雪姫」とは別の人物を指している

15 人称代名詞というのは印欧語など「基本的に性数格の一致のある言語において、その一致特性のみをになう範疇」[田窪 [1997: 14] のことである。つまり、性数格の一致という統語規則のない日本語には、印欧語の人称代名詞と同じものはないということである。田窪 [1997: 14] は、代名詞のうち自称詞(「わたし」等)と対称詞(「あなた」等)を、名詞類の中の一つのカテゴリーとして「人称名詞」と呼んでいる。他称詞(「彼」等)は、名前を知らない女性に「彼女」と話しかけることもあるため、人称名詞ではなく、固有名詞に近い名詞で、「名前のわからない固有名詞のようなもの」だと述べている[田窪 1997: 37-38]。

可能性もゼロではないのである。つまり「白雪姫」と「彼女」の関係が明確だというわけではなく、「彼女」を使ってもあまり結束性が高まらない。日本語では固有名詞の「白雪姫」を繰り返したほうがわかりやすく、そのような反復は不自然なものではない。

英語やドイツ語では同語反復を避ける傾向が強く、関係のある他の語に言い換えて表現されることが多い。これは冠詞や人称代名詞、指示代名詞などの機能によって結束性を構築する手法である[池上 1983、田中慎 2008]。しかしそういった機能のない日本語では言い換えはあまり行われず、同語反復が結束性を構築する手段でもある。他の語で言い換えると、それが同一人物を指しているのかが曖昧になり、読み手の理解を妨げてしまうこともある<sup>16</sup>。

## 5.2 代名詞「彼」

(11) は (2) と (7) で検討した『魔法の声』のあらすじ説明の続きの部分である。ここでは②の「彼」について考えたい。

- (11) ①次の日、メギーとモーは裕福なエリノルおばさんを訪ねます。②そこ、モーはエリノルの大切な本を修復したいと言いますが、実は、エリノルの膨大な本収集に彼の本を隠したいです。

②の「彼」は「モー」を指している。「モー」というのは主人公「メギー」の父親である。日本語母語話者にとってこの「彼」は、誰か別の人物であるように感じられ、登場人物の関係がよくわからなくなってしまう。その原因は「彼」という語の性質にある。「彼」は同一文内の先行詞を指示できないという制約があり、同一文内の先行詞を指示する場合は再帰代名詞「自分」を使うのが自然である[牧野 1980: 205-206]。

前節で述べたように、日本語の代名詞をドイツ語などの代名詞と全く同じように使うことはできない。日本語の「彼」「彼女」といったいわゆる三人称代名詞の使い方には (12) のような制約がある。

---

また、日本語の代名詞は、指示詞とともに「あの彼」や「この私」などと使えることも、印欧語の人称代名詞とは異なり、名詞と同じ性質を持っていることを示している。

16 Ide [2004] は反対に、日本人ドイツ語学習者について、ドイツ語のテキスト中で言い換えられた指示対象を異なるものとして理解してしまうというドイツ語習得上の課題を指摘している。

- (12) 「彼」使用の制約
- 先行詞がある [渡部 2006]
  - 同一文内の先行詞を指示できない [牧野 1980]
  - 話し手にも聞き手にも既知の人物である [田窪 1997、庵他 2001、渡部 2006]
  - 話し手も聞き手もその人物に共感していない、客観的記述である [牧野 1980]

「自分」には (13) のような制約がある。

- (13) 「自分」使用の制約
- 話し手も聞き手もその人物に共感している
  - 主文の主語と照応する
  - 主文または従属文の述語が主語の心理状態を描出し  
ている [牧野 1980]

次に (14) を見てみよう。これは怪談「牡丹灯籠」のあらすじ説明の中の一文である。

- (14) 後で、新三郎の下働きは髑髏を抱いた彼の殿の死体を発見した。

(14) のわかりにくさは「彼の殿」という表現にある。実はこの「彼」は「新三郎の下働き」を指し、「彼の殿」は「新三郎」を指している。「彼」は同一文内の先行詞を指示できないので、指示できる「自分」を使い、「自分の殿」とするとわかりにくさが和らぐ。しかし (15) のように「新三郎」を使用するほうがより自然である。

- (15) 後で、新三郎の下働きは髑髏を抱いた新三郎の死体を発見した。

## 6 考察3: 「が」と「は」の使い方によるわかりにくさへの影響

### 6.1 文章構造の変容

(16) は (14) で見た怪談「牡丹灯籠」のあらすじ説明の一部である。この部分は (14) より前に位置している。

- (16) ①侍の娘のおつゆと若い浪人の新三郎は恋をした。②新三郎は長い間おつゆと会わなかったから、おつゆが死んだ。③そこからおつゆの侍女のおよねも死んだ。④これから二人の牡丹灯籠を持った幽霊は、毎夜新三郎を訪問した。

(16) のわかりにくさは、主語をマークする助詞「が」と「は」の誤りによる。②では、従属節中の主語「新三郎」は「が」でマークされるべきである。従属節の主語なのに「は」でマークされると、文構造に矛盾が生まれ、「から」によって接続された前節(新三郎...おつゆと会わなかった)と後節(おつゆ...死んだ)の因果関係がよくわからなくなってしまう。④では、新情報である「幽霊」は「が」でマークされるべきである。「は」でマークされると、読み手は既出の人物を探したくなってしまい、混乱する。

主語をマークする助詞としての「が」か「は」かの選択は、単なる不自然さを越えて、文章構造をも変えてしまうものである。単文レベルでは、「が」は述語と名詞の格関係を表し、「は」は文の主題を表す[野田 1996]。連文レベルでは、「は」は前に出てきたものやそれと関係のあるものをマークするのに対し、「が」は出来事が起きたことを述べる場合、話題を転換する場合に用いられる[野田 1996]。ただし、複文においては、従属節の中で主題が立てられないという制約があるため、従属節中の主語は必ず「が」でマークされるというルールがある[野田 1996]。こういった制約に反すると、文章理解の妨げになる。そのため、「が」と「は」の選択は重要である。

## 6.2 文構造の変容

(17) は映画「ブレードランナー」のあらすじ説明の最初の文である。

(17) 主人公の探偵のデッカード(ハリソン・フォード)はレプリカントというアンドロイドを探し出すストーリーです。

この文を文字通りに解釈すると、(18) のような構造である。角括弧は修飾部を示している。

(18) 主部: [主人公の探偵の] デッカード(ハリソン・フォード)は  
述部: [レプリカントというアンドロイドを探し出す] ストーリーです

しかし、書き手の意図はもちろんこうではない。問題は助詞「は」にある。「は」を使ったことで、「デッカード」が文の主題になってしまっているのである。「デッカード」は本当は従属節(連体修飾節)の中の主語であるから、「が」でマークしなければならない。そうでないと節の範囲が変わってしまう。「が」でマークすると(19)のように節の範囲が変わり、正しくなる。



(19) 主部: なし

述部: [[主人公の探偵の] デッカード (ハリソン・フォード) が [レプリカントという] アンドロイドを探し出す] ストーリーです

複文の場合、従属節の中に主題を立てることはできないため、主語は「が」でマークされる。主節の中の主語は「は」でマークできる。したがって、助詞によって主文か従属文かを見分けることも可能である。この助詞のルールに反すると、文構造が変わってしまうことになり、読み手を混乱させてしまう。

従属節中の助詞の誤りによって文構造が変わってしまう例を見てみよう。(20) は映画「96 時・レクイエム」のあらすじ説明の最初の部分である。②に注目されたい。

(20) ①ブライアン・ミルズと言う主人公は諜報部員として働いていました。②仕事は危険すぎる上に、娘がいるので、早期退職者になることにしました。

②の最初の節の主語が「は」でマークされているため、「仕事は」が文全体の主題になっているように感じられる。しかしそう解釈すると意味的に矛盾が生じるため、「仕事」は最初の節のみの主語であると理解しなければならない。そのためには「仕事」は「が」でマークされなければならない。

## 7 まとめ

本稿では、ドイツ語を母語とする学習者が書いたあらすじ説明の文章を例として、1) 頻繁な主語交替によるわかりにくさへの影響、2) 人物指示表現によるわかりにくさへの影響、3) 「が」と「は」の使い方によるわかりにくさへの影響の3つについて検討した。以下にその内容をまとめる。

1. 頻繁な主語交替は視点の非一貫性と関わりがあり、不適切な主語省略にもつながっている。
2. 人物を指し示す表現の選択が適切でない場合、文章中の人物関係がわかりにくくなる。
3. 主語をマークする助詞として「が」か「は」かの選択が不適切だと、文構造や文同士の関係が変わってしまい、人物関係もわかりにくくなる。

この結果から、視点、主語省略、人物指示表現、「は」と「が」の違いが、日本語の文章を書く上で重要だということがわかる。ドイツ語を母語とする学習者にとってこれらが習得困難である原因には、ドイツ語と日本語の違いもある。しかし、

そういう言語間の違いを、日本語を母語とする日本語教師はあまり認識していない場合も多いのではないだろうか。

文章のわかりにくさの要因はもちろん、本稿で検討した3点に限られたものではない。例えば、指示詞の使い方、接続詞の使い方、語彙の選択などもあり、多様な問題が絡みあった複合的なものでもある。そういった問題について、教師が教育に還元できるほど研究が進んでいるとはいえない。そのため、明示的に学習者に教えられていないことも多い。教師は日ごろから意識し、考え学んでいくことが必要である。

### 【参考文献】

- 庵功雄他 2001. 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク, 東京.
- 池上嘉彦 1983. 「テキストとテキストの構造」国立国語研究所『日本語教育指導参考書 11 談話の研究と教育 I』大蔵省印刷局, 東京, 7-42.
- 石丸晶子 1985. 「文章における視点」『日本語学』4号 12巻, 明治書院, 東京, 22-31.
- 大江三郎 1975. 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂, 東京.
- 久野暉 1978. 『談話の文法』大修館書店, 東京.
- 迫田久美子、小西円、佐々木藍子、須賀和香子、細井陽子 2016. 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』第6巻第3号, 93-110.
- 田窪行則 1997. 「日本語の人称表現」同(編)『視点と言語行動』くろしお出版, 東京, 13-44.
- 田代ひとみ 1995. 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』85号, 25-37.
- 田代ひとみ 2005. 「日本語学習者のストーリー説明文の問題点—わかりにくさという観点から—」『言語文化と日本語教育』30号, 1-10.
- 田中慎 2008. 「代名詞使用から見たドイツ語テキスト構成のしくみ」三瓶裕文・成田節(編)『ドイツ語を考える—ことばについての小論集—』三修社, 東京, 202-211.
- 田中真理 2001. 「ディスコースと日本語教育」平澤洋一(編)『認知文論』おうふう, 東京, 183-229.
- 永野賢 1985. 「文章における主語の連鎖」『日本語教育』56号, 1-12.
- 成田節 2008. 「werden 受動の意味と用法—Bernhard Schlink „Der Vorleser“の受動文を例に—」三瓶裕文・成田節(編)『ドイツ語を考える—ことばについての小論集』三修社, 東京, 113-121.

- 野田尚史 1996. 『「は」と「が」』 くろしお出版, 東京.
- 牧野成一 1980. 『くりかえしの文法』 くろしお出版, 東京.
- 松木正恵 1992. 「『見ること』と文法研究」 『日本語学』 第 11 巻 第 9 号, 57-71.
- 水谷信子 1985. 『日英比較 話ことばの文法』 くろしお出版, 東京.
- 森山新 2007. 「応用認知言語学的な日本語教育の試み」 『日本認知言語学会論文集』 7 号, 1-11.
- 山田純 1985. 「文における視点」 『日本語学』 4 号 12 巻, 明治書院, 東京, 32-40.
- 渡部学 2006. 「日本語と英語におけるテキスト指示: 日英談話構造比較の一視点」 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎(編) 『日本語文法の地平 3』 くろしお出版, 東京, 99-117.
- 魏志珍 2010. 「台湾人日本語学習者の事態描写における視点の表し方—日本語の熟達度との関連性—」 『日本語教育』 144 号, 133-144.
- Ide, Manshu 2004. Ordnung der sachlichen und logischen Gliederung: Topik und Gedankenführung in mhd. Texten. In: Mattheier, Klaus J./Nitta, Haruo (Hg.) *Sprachwandel und Gesellschaftswandel: Wurzeln des heutigen Deutsch*. Iudicium, München, 35-68.
- Kato, Yumiko 2011. *Cinderellas Standpunkt: Eine Untersuchung zur Darstellung der Perspektive im Rahmen des Japanischen als Fremdsprache*. LIT, Berlin.
- Kleinmann, Howard H. 1978. The strategy of avoidance in adult second language acquisition. In: Ritchie, William C. (Hg.) *Second language acquisition research: issues and implications*. Academic Press, New York, 157-174.